



司馬江漢 生涯と画業

成瀬, 不二雄

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

1996-01-24

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙1991

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2001991>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・（本籍）	なる せ ぶ じ お 成 瀬 不二雄	（香川県）
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）	
学位記番号	博ろ第5号	
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当	
学位授与の日付	平成8年1月24日	
学位論文題目	司馬江漢 生涯と画業	

審 査 委 員	主査 教授 百 橋 明 穂		
	教授 鈴 木 正 幸	教授 眞 方 忠 道	
	助教授 横 田 冬 彦	教授 鈴 木 利 章	

論 文 内 容 の 要 旨

司馬江漢（1747/48～1818）は、江戸時代後期の有名な洋風画家で、常に画業により生計を立てていた。しかし、また彼は万国の地理、西洋の天文学などを紹介する書物を著し、世界地図や自然科学の説明図を製作した。ときには視眼鏡、耳鏡（補聴器）、和蘭陀茶臼（コーヒ挽き）などを工夫し、頒布する技術家、あるいは事業家としての一面もあった。また、地理学関係の著作において、西洋の進歩した社会制度や教育事業を紹介し、旅行記や教訓画において、控え目ながら開国貿易論や人間平等論を説くなど、彼には鎖国体制下の進歩的思想家としての業績もある。一方、晩年の随筆には、それまで彼が研究してきた西洋自然科学と老荘思想とに基づいて、独特の人生の哲学が展開されている。他に、『西遊日記』や『吉野紀行』などの旅行記を読むと、江漢が江戸時代後期の社会や民衆生活の記録者として、一流の腕前を示したことが分かる。

一般に、彼の文章は明快で分かりやすく、またいかにも画家の文章らしい色彩感に富んでいるので、そこには文筆家としての優れた才能が認められる。さらに、彼が晩年に真実の年齢に加算した年齢を自称したこと、あるいは生前に死亡を告知したことなどの奇行、そして長年の師友との不和、さらに限られた人々に対して示したそれと対蹠的な人間的真情を思うとき、江漢自身が人物研究の興味尽きない対象であることを思わせる。

したがって、江漢の人間と業績について、漏れなく研究するには、広範囲にわたる専門的な知識が必要となるので、あらゆる方面の読者を納得させるような司馬江漢論を書くことはなかなか難しい。そのため、これまででも江漢についての多くの論文が書かれ、また幾冊かの図書も出版されたが、それらには何らかの専門の偏りを感じさせるものが多かった。今回の著者の学位論文は、なるべく広い範囲から江漢の業績の全容を捉えることを第一の目的としている。ただ、著者は美術史の学徒であり、日本近世絵画史を専攻しているので、今回の論文でも江漢の正確な伝記と画業とを関心の中心としている。

ところが、江漢の作品と称するものには、古くから偽作、あるいは他人の作品を変造したものが極めて多い。そこで、最近になって彼の遺作の展覧会が開かれるようになり、また作品の年代的整理が

進展するまでは、彼の画業の実体はほとんど明らかでなかった。今回の論文においては、その「作品篇」にこれまで著者の知ることのできた江漢画のうち、真作と考えられる作品をできるだけ多く集め、画風と落款印章と関係史料とに基づいて、それらを年代的に整理し、江漢の画業の実体を可能な限り明らかにしようとしている。また、各図版には正確な要目と解説とを付けている。

一方、「本文篇」においては、多くの文章史料や作品に基づいて、江漢の七十年余の生涯をできるだけ詳細に、また正確に叙述し、その画家としての業績を明らかにすることを目的とするばかりでなく、趣味人として彼の関係した陶磁器、及び視眼鏡器具、和蘭陀茶臼（コーヒ挽き）、写真鏡、耳鏡、エレキテルなど、彼の工夫した奇器を紹介し、併せて彼の西洋自然科学の普及者としての業績を取り上げている。また、江漢の日記、随筆、書簡などによって、彼の人生の哲学者としての思想、その宗教観と道徳観、社会思想家としての提言について論じ、次いで彼の人間としての性格に及んでいる。

そして、「本文篇」の最後には、筆者の日本近世絵画史の研究者としての立場から、特に「江漢画の作品価値」について数章を設けている。すなわち、江漢はこれまで洋風画の先駆者としては高く評価されてきたが、ここでは彼の西洋人物図、西洋風俗図、さらには西洋画法による日本風景図などの洋風画作品のほか、その和漢画、浮世絵、肖像画、思想的教訓画なども取り上げて、広く彼の作品の芸術的価値を論評している。つまり、ここでは江漢を時代の先駆者としてばかりではなく、歴史上の画家として評価しようと試みたわけである。

ちなみに、江漢は日本の画家の中では有数の知識人であり、膨大な著作を遺し、多くの日記や書簡を書き、その中で自分自身についてもいろいろのことを物語っている。日本の画家のうちでも、江漢はその伝記資料の豊富な人物の代表と言うことができよう。しかし、まさにその故にこそ、正確な江漢伝を書くことは大変難しい。率直に言って、江漢はその自己主張の強い性格のため、ないしは職業画家としての立場から、自分にとって利益のあることは多く書き遺すが、都合の悪いことについてはほとんど口をつぐんでいる。そればかりでなく、ときには事実と反することさえ言うことがある。そして、奇人として年齢加算や偽死などの奇行に走り、また江戸文化の爛熟期に生きた生粋の江戸っ子として、悪戯心もあったから、彼の書き遺していることは、そのまま信じられない場合が極めて多い。

一例を挙げると、彼の死没年月日は明らかだが、彼の自筆文献に混乱があるため、その享年さえ完全に判明しているとは言い難い。そこで、本論文においては、江漢の書き遺した文献史料に関し、筆者が正当と信じる厳密な史料批判を行い、江漢の伝記と業績について、現在最も正しいと考えられる叙述を行っている。

本論文は、これまでの江漢研究を集大成し、それに新資料や新知見を加え、日本近世の重要な画人である江漢の研究に新しい視野を開こうとするものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は筆者が最近出版した『司馬江漢 生涯と画業』（平成7年6月八坂出版）を学位論文として提出したものである。本論文は、本文篇と作品篇の二部よりなり、本文篇には37の章、385頁と司馬江漢年譜と索引が付いている。作品篇には305件の作品と作品目録が載せられている。

司馬江漢（1747/48～1818）は、江戸時代後期の著名な画家、ことに洋風画という、当時の一般的な美術の動向の中では、特異な分野に先鞭をつけた画家として、高い評価を得ている。江漢の作として比定された相当な数の作品が世に伝わっている。しかし江漢は単に洋風画のみを製作したわけではなく、その画業の範囲も腐食銅版画、西洋人物画、西洋風俗画、そして西洋画法による日本風景画な

どのいわゆる洋風画のほか、浮世絵から和漢画まであり、その技法にも木版画、銅版画、油絵から、従来の日本画や水墨画、さらには当時の文人達の間で流行した席画にいたるまで多様である。しかもその中には偽作が極めて多い。そのため従来から江漢の画業についての研究には総合的な作品の再検討が必要であった。本論文は、長年にわたる作品研究の成果として、厳しい鑑識眼を基に個々の作品の選別・評価を前提に進められている。作品篇には江漢画をほぼ制作年代順に収録し、個々の作品には作品解説が付されている。本文篇は江漢の画業を年代順に追う形で論が構成されている。しかし一方江漢はまた当代随一の知識人として万国の地理、西洋の天文学などの自然科学や西洋医学など、最新の西洋事情に関する書物を著し、地理学関係の著作において、西洋の進歩した社会制度や教育事業を紹介し、また開国貿易論や人間平等論を説くなど、鎖国状態にあった当時においては進歩的な思想家としての側面もある。さらに晩年の随筆にはそれまで研究したきた西洋自然科学と古来の老荘思想や禅の教えとに基づいた独特の人生哲学も披瀝されている。よって司馬江漢研究は広範囲にわたる高度な専門知識を必要とする。更に彼には優れた旅行記もあり、文章家としても希な才能があって、彼の生涯の足跡をたどる記録・文献に事欠かない。しかし江漢の自尊心の強い個性的な性格はその文献記録をそのまま信用することを躊躇させる。こうした困難を克服し、多くの文献に対する慎重な検討をへて、構築された江漢像は冷静な視点と、実証史学としての論証の確かさを確信させる。

本論文は画家としてのみならず、鎖国時代のなかにあって西洋文化への先駆者としての、生涯と業績を総合的に跡づけつつ、彼の画業形成の過程を細かく追求している。旧来の狩野派や鈴木春信門下における浮世絵習得の中から画家としての道を歩み始め、やがて宋紫石などを通して、中国から長崎に伝来していた沈南蘋画風へと移行する遍歴を作品の紹介とともに実証し、やがて西洋の文物に接するようになった契機を宋紫石、平賀源内や、秋田藩主佐竹曙山・小野田直武などとの接触に求め、人間関係の推移とともに江漢の画風が形成されていったことを検証しているのは本論の大きな特色であり、従来の研究より大きく踏み込んだものといえる。また江漢の西洋画法の摂取や西洋の進歩的な技術や地理・天文学などの知識が、先述の平賀源内や宋紫石、さらには杉田玄白・大槻玄沢、筑前秋月、藩医緒方春朔、長崎通詞木本良永などの蘭学者が所持していた、オランダから舶載された蘭書などを通じ、さらにその具体的な姿はその挿図の版画や銅版画からのものであったことも検証している。江漢はかならずしもオランダ語に精通していたわけではないが、それらの珍しい文物やその表現法に惹かれていった。江漢の西洋画法や西洋の文物に関する知識の具体的な導入路を上記のように検証しながら、西洋美術の日本への影響が単に美術の世界にとどまらず、相互の文化の媒介としての機能にも大きな役割を果たしたことを、明確で具体的に実証している。そして江漢が単なる西洋画法・西洋文物の紹介者としての存在ではなく、これらの新知識を江漢が自らの画業の中に定着させ、日本の風土・社会に消化・吸収させる役割を果たしたことを明らかにし、筆者の独創的江漢論を提起する。すなわち、終章において江漢の晩年の画風変遷は決して単なる日本画への回帰ではなく、西洋画法の日本の風景画や人物画への適用の過程とした。すなわち和魂洋才論のめざした西洋画法の摂取・吸収の途上にあるものと結論づけた。また一方油彩画や銅版画からの撤退は、これらの技法の一般への普及による陳腐化と、彼の自己主張の強い個性からくる新天地の開拓として解釈し、江漢画に対する作品価値を論じ、従来洋風画家としての高い評価にのみ偏りがちであった一面的な江漢論を批判し、江漢画への多様な価値評価の可能性を指摘している。それによって江漢画の日本美術史、ことに江戸時代後期における、納得できる定位置を定めたものとして、美術史学研究の中で大きな評価が与えられよう。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は、論文提出者成瀬不二雄が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。